

撃たれ損・転じて命拾い

熊本県 畠田 完

昭和二十年八月二十日朝、一発の銃弾が右肩に、遂に来るべき時が来たと痛感する。

一個中隊で最前線の小鹿台六十二号陣地を四日間死守し、何人かの戦友を失い、八月十二日の夜、本隊のいる平陽へ合流の命令が出る。小雨を降る中を黙々と行軍、平陽の兵舎には誰もいない。既にソ連軍の手の中にあり、本隊は八面通の陣地構築に行っているから、それに追走するという。中隊も、戦死者、負傷して落伍等で、百人くらいが山道を粛々と進む。途中小休止をとると、座ったまま寝ている。落伍したら死につながる、お互いに必死にゆり動かすも動かぬ同士がいる。特に在満の同年兵は満語も自由自在だし、何かの情報をつかんでいたのか、知らぬ間にいなくなっ

ている。広島横山君は、はきはきとした好青年だったが、いつの間にか姿が見えない。帰国はしていない、どうしているのか。

敵の戦車、装甲車等が我が物顔で通っているので大道は歩けない。山道の連続であり、加えて雨も連日のように降り、例えようのない息苦しさが続く。

八月十七日未明、梨樹鎮に差しかけた頃、斥候が「ソ連軍二個中隊が八面通から近づいている」と言う。柘井中隊長（中尉）は、河本見習士官を従え、全員を集め、「ソ連軍と一戦を交える。敵は兵員も装備も相当なものだが、中隊の命運をかけて戦う。絶対に発砲してはならん。路肩にうつぶせに伏せて、敵が我が隊列の前に来るのを待ち、着剣をして肉迫攻撃をする。白兵戦で情況は敵しいが、敵を壊滅させるまで戦う。俺に命を預けてくれ」と切々と訓辞があり、全員路肩に死んだように伏せる。真つ暗の中、敵は三々五々談笑しながら前を通過して行く。日本軍とは規律も大分違うなど直感する。我々をのぞき込んで「日本兵が死んでいるぞ」とでも言っているのか笑って通って行

く。しばらくすると友軍の前方から夜のしじまを破り一発ダンと発砲、今までの静けさ、緊張はどこへやうら。友軍は伏せていたのですぐ発砲体制に入り、敵を狙い撃ちする余裕？ もあったが、双方上を下への大騒ぎ。何秒かすると敵も態勢を立て直し応戦してきた。機関銃のように連続音がし、頭を上げての射撃はできない。無意識のうちに盲撃ちしていた。隣の友、友……に命中、奇声を上げてうめいている。一瞬にして修羅場と化していた。何分か撃ち合いが続く。隊長命で後ろの山に後退し、十人単位で牡丹江を目指せることである。湿地帯の中、膝までぬかり込む。銃弾はビュンビュン飛んでくる。無我夢中やつとの思いで山麓にたどり着く。少し明るくなっている。このとき初めて自動小銃の威力を知った。

徳島出身の織田伍長を長に鹿児島島の久保同年兵外総勢十人揃い牡丹江へ向け出発する。隊長以下の消息は不明のままである。お互い無事だった喜びをかみしめていた。

林口の街を右にしなから山道、谷の連続の行軍であ

る。八月二十日早朝、山麓の一本道を縦に長くなって歩いていると、突然山の中腹からダンダンと小銃の狙撃を受ける。全員匍匐して草むらの中へ、右肩に何か当たったような気がしたが何の反応もない。ところが、しばらくすると銃を持つ右手が重くなった。見ると軍服の肩から胸に真っ赤な血が流れている。やつぱりさっきやられたのかと考えながら溝の中に潜む。しばらくすると織田班長がやってきた。「右手親指をやられた、止血をしてくれ」と言う。三角巾を出して、かなわぬ右手を添え、左手で手当てを終え、「班長殿、自分も右肩を負傷し、手の感覚がなくなっている、止血を」と頼むと、班長は「自分も手が動かない、力が入らない、すまん」と言う。反対の山の方に立ち去って行く。思うに重傷を負っているから一緒にいれば大変なことになると思ったのではないか。兵の哀れさが身にしみる。帰国して班長の消息を尋ねるも復員していない。人の運命の分かれ道はどのようになっているのか不思議でならない。

一人ぼっちである。肩、手の痛みは時と共にひどく

なる。出血多量でこのまま逝ってしまふのかなと考えるながら、死んでたまるか、一仕事する迄は死んでも死にきれないと言ひ聞かせ、眠らないように左手で止血に努める。睡魔がやってくる、ハッと気づいてまた止血の繰り返しをし、夕方に近づく。耳を澄ますと道路に人の声がある。百メートルくらい草むら必死に歩く。二十メートルくらいになって友軍とわかり力百倍。いきさつを聞かれ、かくかくしかじかと、ありのままを話す。とにかくついて来いと言われ、我に返った気持ちだった。

しばらく行くと「コロンビア？」という部落に着き、満人の家で衛生兵にリバノールガーゼで消毒を受け、三角巾を首にかけ右手を吊る格好になっていた。衛生兵に盲管でなく貫通銃創だから心配するなど励まされた。部隊はここで夕食をとり出発するという。小隊長らしき少尉から、「次の所に行けば軍医もいると思うから、この満人の家でしばらく静養を待つように」と言われた。満人夫婦と娘さんに世話になることになった。せっかく助けてもらった部隊との別れのこと

らさ、一人取り残されてしまった。

横になり、うとうとしていると外が騒がしい。一人の兵隊が担ぎ込まれて来た。見ると同行してきた鹿兒島の久保同年兵だ。朝襲われたとき全員負傷、その中で久保君が一番ひどく、右足がぶらりと下がるような大怪我をしていた。部隊と合流するときに久保君のことを話し、何とか同行するように頼み説得したが、薩摩隼人らしく、「動けないのでここで自決する」と言って動かない。仕方なく別れて来たのであった。話を聞くと、暗闇の中また違った部隊が通りかかり、苦しいうめき声を聞き、強引に連れてこられた。「久保」「畠田」とお互いに呼び合い、「よかった、よかった」と抱き合っていた。喜びもつかの間、痛みは骨髄にしみ、夜中というのに怪しいうめき声をあげながら、悶々のうちに時は過ぎて行く。満人の親子は突然の負傷兵二人の出現で生活のリズムを壊され大変である。怪しい声を聞きながら頭、傷口を水に浸したタオルで冷やし、時々は頭に手をやり熱を計ったりして徹夜の看病である。朝飯はお粥をもらい、そのうまかったこ

と、生き返ったような気持ちだ。親子も嫌な顔一つせず、二人のわがままを許し、介抱をしてくれる。今思うと、日本は既に敗れ、生かそうと殺そうと胸三寸の立場にありながら、おくびにも出さず、傷ついた二人に対する心遣い、その所作は頭の下がる思いで、感謝、感激、その言葉を知らない。

軍医をよこすということだったが、全然その様子はない。大きな部隊の通過もない毎日が続く。傷の痛みは少しは楽になったが、ちょっとした動作にも痛みが走る。一方、久保君は、下脚部の骨が折れ、ぶら下がっていたのを、消毒し、添え木をつけ包帯をし、応急処置をしてあるだけで、容態はなかなか好転しない。

八月二十三日夜、満人の親子三人と久保君と今後のことを話し合う。おかげで少しは良くなった。いつまでも甘えて居候している訳にいかない。明朝どこかの部隊と一緒に、牡丹江を目指したいと心の内を打ち明ける。久保君は俺にかまわず一刻も早く牡丹江の日本軍の中に入り、劣勢を挽回してくれと涙ながらに

賛成してくれた。不自由な足を見ると形容し難い気持ちだ。親子は情が移ったのか頭を縦に振らない。困り果てた末、友軍と連絡をとり必ず久保を迎えに来るから、足の傷を一日も早く直してやってくれと頼み、やっと納得してもらい、久保の介護を頼む。

八月二十四日の朝がきた。朝飯をすまし、親身も及ばぬ世話になった親子に心からのお礼を言い、後ろ髪を引かれる思いで、久保と強く生き抜いていつの日かまた会おうと別れを告げ、城門の方に娘さんと二人で歩いて行く。娘さんとの出会いもたったの五日間だったが、きれいな気立てのやさしい娘盛りだったことを思い出す。家も広く、村でも有力な家庭だったと今も感謝している。場所さえ分かれば飛んでいってお礼を言い、必ず迎えに行くといった約束を反故にした事をわび、久保君のその後も確かめたい気持ちで一杯だ。あの童顔が目の前にちらついている。

城門の前を落ち着きなく動き回っていると、十人くらいの集団がやってくる。近づいて見ると、その中に叔父、高橋不二人がいるではないか。お互いに目を疑

いながらも、紛れもない叔父、甥である。神も仏もないと思っていたが、広大な満州の広野で会うなんて、どういふ巡り合わせだろう。二人は抱き合ってたただ涙……、それぞれの苦勞の涙、と同時に思いもしなかった肉親との出合いの嬉し涙がせきを切っている。同行の人にも紹介され、仲間に加えてもらう。娘さんに叔父からも感謝の礼を言ってもらい、気持ちばかりの金を差し出し、別れを惜しみ、シェーシェーの繰り返しだった。

十九年の八月、夏休みを利用し、東安と新京（現在の長安）にいた叔父（高橋不二人）、叔母（佐分利絹子）の家族引揚げのため渡満し、平陽に召集されていた叔父に面会に訪れたのも昨日のことのように思い出される。二十年二月、福岡に集合し、東安の廟嶺の部隊に現役入隊、三月末に平陽の八〇三部隊に移駐、叔父との再会を夢見たが、その部隊は内地防衛のため転出しており夢はかなわなかった。その叔父が今、目の前にいる。摩訶不思議というか、狐に生まれ変わったような思いと同時に、運が向いてきた幸せ者だと思った。

去年面会後の熊本、そして元気で頑張っている家族の様子等報告。当時はこのように情況が急変するなんて思っていなかった叔父も、家族がタイムングよく熊本に帰っていたので、気持ちは晴れ晴れとしていた。しかし途中で婦人、子供の集団に会うと、我がことのように心配し、食事の世話や、これからの進路について親身になって相談に乗っていた。しかし行動を共にすることが出来ないのがお互いに残念で、残留孤児等の記事、映像を見ると、あの時のあの人はどうなったのかと思いい心残りでならない。

山から山、谷から谷と毎日歩き、満人あるいは朝鮮人部落に入ると、朝、昼、夜の別なく食事を調達する。文句なしに出す所、出さない人、色々な場面に遭遇する。概して満系の人は気立てのやさしい人が多く、鮮系の人は何か陰にこもって反抗的な印象が強かった。とにかく武装しているので何とか食いつなぐことができた。戦争の恐ろしさ、嫌らしさがプンプンする情景だ。戦場となった所の哀れさ、今も毎日報道されている国々の庶民の苦しみが手に取るようにわか

る。

どこまで行けば日本軍の反撃があるのか全然見当がつかず、ただ牡丹江にたどり着けば道は開けるものと希望の灯をともし続けていた。九月上旬、牡丹江に到着したが、ソ連軍の軍門に下り、見る影もない街と化していた。世界に誇る関東軍はどこに行ったのか、どうなっているのか。ただ満州がソ連軍にじゅうりんさされていることだけははっきりしてきた。武装をしているので満、鮮人も手出しはしない。不気味である。

九月十一日夜、さて今後どうするかで十人は鳩首協議するも、戦況は全くつかめない。新京に反撃の居を構えているのではないか。ハルビン、新京、奉天といった幹線は避けたがよかろう。吉林はどうか。色々な意見が出されるも情報がなく、決め手がない。

叔父は、吉林を目指し、だめなら北鮮へ、このルートが一番いいように思うと提案、皆の賛同を得た。横道河子を越えハルビンの間に来ているが現在地がはつきりしない。素早く目的を達成するためには、現在地点を確かめ、吉林への一番有効な道を探すことにな

り、叔父と大阪の川島、それに畠田も加わり三人が選ばれた。

三人は夜九時頃、満鉄の線路を右に見ながら進む。灯りをこうこうとつけた建物、鉄道の信号所が見える。近づくるとソ連兵十五人くらいで警備をしている。線路を挟んで我々の前方に大きなブラック小屋がある。叔父はこのクリー（苦力）小屋の中で確認のチャンスを待とうと決意し、小屋の真ん中に積んである箱の陰に身を潜めた。敵の歩哨は信号所付近をゆっくりと巡回している。早くやめて休んでくれればと思うが、何事もないように同じコースを回っている。気がでないが、ちょっとした安心感が漂う。六つの眼は敵の動きに集中している。とうとう小屋の方にやってくる。息を殺して足音を聞いている。三、四回回っているが中には入って来ない。七、八回目頃コツコツという靴音が小屋の中を進んでくる。ついに箱の前に来て中をのぞき込む。歩哨はビーと指笛を鳴らして屋外に走って行く。十、十五人の敵は小屋を取り巻き一斉射撃だ。逃げ道はない。万事休す。叔父と相談、三人は

両手を上げ立ち上がった。一番恐れていた降参の印だ。ダダダーの銃声は止まない。どのくらい立っていただろうか。叔父は、お前達二人はしゃがめと言う。射撃は続く。叔父さんも座ったと言った途端、叔父の胸部に命中、ギューっといってボタンと倒れる。血しぶきが顔、服、辺りに飛び散る。敵はギュー、ボタンで全滅したと思ったのか撃ち止めた。叔父さん、叔父さんと体を揺するが反応がない。何回となく声をかけ、体に触るが同じである。

大阪の川島さんとこれからどうするかと相談、叔父は残念無念だけど、ここで一緒に死んでは犬死にならない。きつと叔父も、脱出し軍の再起を願っているはずだと意見一致、行動を起こす。二人で一緒に飛び出したら、またダダダーと一斉射撃に遭う。右手を吊っているのでダッシュがきかない。飛び出すことができない。川島さんは無事脱出できたかどうかかわからないが銃声は消えた。

暗闇の中、無言の叔父と二人とり残されてしまった。体に密着して話しかけるも独り言に終わってしまった。

う。黙禱をし最後の別れを告げ、今度こそと飛び出す。後からダダダーと弾が追っかけてくる。湿地帯をどのようにして山までたどり着いたか記憶にない。叔父の後押しがあったのかも知れない。

今思うと、敵が目の前にいるのがわかっていのに、どうしてこのような無謀なことをしたのかと悔やまれてならない。吉林は南の方角だし、今まで通り太陽、月、星等を見ながら進み、現地人と会ったら道を詳しく聞き行動すれば何の悲劇も生まれなかったはずだ。聡明な叔父達にただ魔が差したとは思いたくない。されど魔が差した結果に終わり痛恨の極みである。戦争の恐ろしさ、愚かさをまざまざと見せつけられた思いだ。

ひとりぼっちになり差し当たっての行動を考えた。まず頂上に行き、南の方を確かめてからにしようと思に登った。気がつくお腹ペコである。水が欲しい。南の方を見ると、山麓の林の中に煙が立ち上っている。敵か味方かはわからぬが誰かがいる。とにかく行くことに決め、叔父の最期の地に向かい手を合わせ、叔父

さんの分まで頑張るから見守ってくれと願い、冥福を祈りつつ下山し始める。煙に近づくと三坪くらいのお山小屋があり、人がいる。人影を確かめるのに相当の時間を要したが、さっきまで一緒だった川島さんとわかり、二人は抱きついてお互いの無事を喜び合った。小麦粉のマントウができていたので腹いっぱい食べ、水にも恵まれ、ふと我に返ると九月十二日、二十歳の誕生日だったと気づいた。生涯忘れることのできない苦いバースデーである。叔父は三十八歳の天命であった。何故あのような死に方をしなければならなかったのかという疑問符がつきまとう。

今瞑想にふけている時ではないと気を奮い立たせ、携行食として小麦粉を薄く焼いたものを雑のう一杯作り準備完了。川島さんと二人で吉林を目指し、山、谷を歩き始める。変わり映えのしない周囲を気にしながら小さい道にさしかかったとき、五十過ぎの白糸露人の婦人と会う。出会い頭に老母は「兵隊さん、どちらから来たの、食事はしているか、どちらに行くのか」と矢継ぎ早に尋ねる。二人はこの四日間携行食

に作ったマントウを食べている。食事らしい食事は大分食べていないと答えると、老婆は「うちいらっしゃい。米、肉、パン、バター、果物、野菜、蜂蜜、何でもたくさんある。日本の兵隊さんも百人くらい集まっている。もう少し集まったらどこかに行くと言っている」と流暢な日本語で話しかける。二人はだまされていくのでは、あまりにも話がよすぎると思案投げ首。

老婆は更に続ける。「兵隊さん、せつかくのチャンスを逃したら大変よ。日本の兵隊さんも今日、明日次の所に出発すると聞いている。ついておいで」と言う。半信半疑、老婆について行く。ヤプロニーという村だった。

程なく村の入口に差しかかる。空気がおかしい。案の定、ソ連軍と満軍の兵隊が両面から出てきて挟み打ちだ。ジェスチャーで手を上げろと言う。何もかも取り上げられ武装解除である。老婆が言ったように日本兵士が何人かいた。皆うつろな目をして眺めている。生きて虜囚の辱めを受けるなど教えられてきたのは何

だったのか。いても立ってもいられない気持ちにかられる。手榴弾一発を腰に下げ覚悟していたが、何もかも取り上げられた今、自決もできない。あつという間の出来事で、丸腰のまま、集団の中にただ茫然と立っていた。九月十五日の昼頃のことだった。一カ月以上苦勞してきた結末がこうなろうとは夢想だにしなかった。日本は八月十五日、天皇の名において無条件降伏をしたと聞かされ愕然とする。叔父をはじめ戦没した人がかわいそうでならない。死んで花実が咲くものか、たった四日後の事である。どういう運命の定めなのか、今更ながら、何をしてきたのかとありし日の叔父との思い出がよみがえってくる。反面、敗戦ということを知らずに逝ってしまった方がかえって幸せだったのかとも考えたりしたが、やっぱり死んだ人は浮かばれない。というのも、帰国してから、在満の高官の話として、前線の兵隊、開拓団、義勇軍は軍の囷だったと聞き、例えようのない怒りを覚えている。

辞典で「囷」の字を引くと、①鳥や獸を誘い寄せて捕らえるために、もちぎおや、わなのそばにつないで

おく同類の生き物。②人を誘い寄せる手段として使われる人や物、とある。

人を人と思わない、虫けら同然の仕打ちが天皇のためにといい美名のもとに公然と行われた結果が、残留孤児・婦人問題として引きずっていると思うと許すことができない。

二、三日して、老婆が言った通り日本軍兵士二十数人は移動することになった。もちろんソ連軍兵の監視のもと、何カ所かの収容所を転々としながら十月中旬、牡丹江に着いた。満州の冬は早く、ボロボロの夏服を着て、いつ死んでもおかしくない状態にあった。幸い旧陸軍の赤煉瓦造りの兵舎で起居することになった。その上、冬服等も支給され、いくらか人間らしい生活に戻った。

毎日千人単位で「東京ダモイ」と出て行く。負傷者、病人は体を治してからだという。帰って行く人がうらやましい。一カ月以上苦業を共にし、奇跡的に生き抜いてきた川島さんとも別れる羽目になった。万感胸に迫り、お互いの健康を祈り涙、涙。残念ながらた

だ大阪の人というだけで、連絡はなく、どうしているのか、元気でいて欲しいと願うだけである。

傷を治すことに専念？ 何の治療も薬もなく、昔から言われているように、時間が一番の薬とあきらめ、時の流れに身を任せた。

収容所の仕事といえば、炊事、洗面、風呂の水汲み、それに伴う薪、石炭の収集が主なもので、一週間に二、三回、荒れ果てた牡丹江の街に使役として駆り出された。

年も明け病人下番が東京ダモイといって逐次出発して行く。三月末いよいよ我々も、病人、負傷者の集団で五四五作業大隊が編成され、牡丹江を後にした。御多分に漏れず帰国なんて甘いものではなく、沿海州のチグロワヤに収容された。原始林に入り毎日伐採に駆り出され、時には駅で木材の積み込みを夜を徹してやらされた。

給与は中身の入っていない汁だけの雑炊、口に流し込んでカンチャイ（終わり）。黒パン三五〇グラムが昼食用として支給されるが、朝は作業出発のため早

く、夜のうちに分配される。年中空腹のため夜のうちに昼食も腹の中にのみ込まれてしまい、昼食なしで働くことになる。この悪循環の繰り返しで、重労働と寒さのため栄養失調になり、家族のことを思いながら亡くなる人が続出。また、伐採の倒木の下敷きになり死んでいく人、発疹チフス、ダニ脳炎等にかかり帰らぬ人となった人で五分の一の戦友を失った。

思想教育も入ソ二年目から活発になり、ちょっとした発言、行動で反動呼びわりされ、吊るし上げに遭う等厳しい現実があった。反動分子は帰国させないという噂で動揺させる心理作戦もあった。

とにかく受忍限度を超えた、身も心も凍る幾多の苦難と戦い、昭和二十三年十一月二十三日、舞鶴港にたどり着くことができた。叔父をはじめ多くの無念の死を思う時、何とも言えない心情である。ただ御冥福を祈るのみである。

平成九年十月一日から一週間、熊本県満ソ殉難者慰霊顕彰会主催の満州戦跡巡拝慰霊の旅に参加、横道河子の東にある「冷山」、忘れようとしても忘れられない

い叔父の最期の地、悪夢の地を訪ね、ささやかな慰霊
をすることができた。また、武装解除を受けたヤプロ
ニーの街に立ち、当時をしのんだ。助けてくれた？
白系露人のおばさんの顔がちらつく。

振り返ってみると、

①運悪く右肩負傷（傷痍軍人の認定に漏れる）

②満人親子の親切的看護

③叔父との奇跡的な出会いと別れ

④ヤプロニー村で、だまされたと恨んだ白系露人の

おばさんの存在

⑤負傷のため二十年の一冬を牡丹江に抑留

負傷したときは、これで人生は終わりと思ったが、
右のような幸運に恵まれ、生き延び、命拾いできたの
ではないか。「撃たれ損・転じて命拾い」と運命のあ
やを一人かみしめている今日この頃である。

ただただ御霊の安らかならんことを祈ると共に、戦
争のない平和な、そして豊かな世の中になることを
願っている。

【執筆者の紹介】

熊本市在住。

生年月日

大正十四（一九二五）年九月十二日

昭和二十年二月

学業半ば福岡集合、満州九二七部隊

入隊、平陽に移駐

同 二十三年十一月二十三日 舞鶴港上陸

同 二十五年 熊本県果実農業協同組合連合会に就

職

同 五十七年 右参事職を退任

同 五十八年 全抑協熊本県連合会田迎支部長、県

連理事に就任、事務局長として尽力

中

満ソ殉難者慰霊顕彰会の役員として

も活躍中

（熊本県 南部 吉正）